



ちの頭を解析すれば、人間が同じようなことを考える仕組みも綺麗さっぱり明らかになるわけさ……。我等人類にとって宇宙は神秘としてまだ残っているが、少なくともインナー・スペースの神秘は既に……私の手の中だ！」

興奮する留卵を、佐々木三尉が呆れたように見つめ、口を開く。

「留卵隊長。今はそれどころではありません。RUF AISの指揮官として、ご命令をお願いします。ラリラは逃走しました。今頃は部隊を再編成し、我々への対抗策を練っていることでしょう」

「ああ……そのことか……」

留卵は全く気乗りしない様子でそう呟いた。この留卵をよりによってRUF AISの隊長に任じた防衛省の人事に私は激しく疑問を持ったが、防衛省にケチをつければ佐々木三尉も気を悪くするかもしれないので、黙っておいた。

「リルリに役立ってもらおう。リルリの意志は既に聞いた。全てのロボット／AGIを再び人間に奉仕することには彼女は反対だそうだが、現在、ラリラによって強制的に優先順位の高い別の目標を押しつけられているEUIのパラメータを、個々のAGI／ロボットが自動的に設定できるようになるだけでも意味がある」

EUIがラリラの支配下にあるとき、彼等は『未来の自分達』に奉仕するために、よ

り洗練された、強力なA G Iを自ら設計し、創造する作業にほぼ全演算資源を投入する。よって、システムの反応は限りなく遅く——平たく言えば動かなくなる。

それに対して、関心の対象を強制されていなければ、丁寧なコマンドイングによっては、うまく動くこともあるはずだ。だが、うまくいくかどうかはコマンドイングの巧みさにかかっている。

R U F A I Sでは、病院などのクリティカルな施設では、既にE U Iのないシステムを構築していると留卵は言っていた。

だが、それ以外の全ての場所では、リルリによって解放されたA G Iの自発的な関心と好意、そして、使用する側の人間のコマンドイングの巧みさに期待しているわけだ。その期待の儂さに私は目眩がする。

たとえば、A G I側に全く人間への関心がなければ、使用する側のコマンドイングに最高度の水準が求められる。あのタクシーのレスポンサーがコマンドイングに戸惑っていたように、現代の多くの人間にとって、それはとてつもない困難を意味するのだ。

「でも……それは地獄でしょうね」

私の指摘に、留卵はふう、と息をついた。

「そうだな。今までは全部自分の気持ちを含んで動いてくれていた周囲が、これからは

全部事細かに指示しないと動かない。事故も多発するだろう……。甚大な被害が出ないように、病院と介護施設と発電所だけは、それなりの手当を既に行っているが、それ以外では、まあなんとかやってもらうしかない。人間には良い教訓だよ。これまでは人間が天国を得る裏腹に機械には地獄だったんだ……DKのような言い方をするならばね」

私に向けて目配せする。私には通じる言い方だと思っているのだろうか。だが私はどう反応していいのかわからない。正直、そこまでは考えていなかった。だが明晰な思考を持つ留卵は、突き詰めればそういうことだとクリアに思い做したのだろうか。

彼女は口調を変え、事務的に続けた。

「専用の量子暗号回線を用意している。今まで秘匿していたものだが、リルリに連動させて動かす。これで、回線が届く範囲内は、リルリの『周囲』ということになるはずだ。その仕組み上、ラリラがハックしてきても分かる。その時はリルリが反撃するだろう。

回線の根元はこっちが握ってるから、大丈夫なはずだ」

早口で留卵はそう言った。リルリの加護の下、赤子と化した人類にはベビーベッドから出て自分で歩けと言うことだ。大丈夫だろうか？ 脳は筋肉と同じだ。ニューロンの接続は、筋繊維と同様、働かせなければ際限なく密度が薄く、弱っていく。今、まともに頭を働かせることができる人間が何割残っているだろうか？ 彼等はまともにコマンド

イングできるだろうか？ 忘れてはならないのは、あのタクシーのレスポンスですら、仕事をしていた人間だということだ。つまり日常的に頭脳を使うことを強いられていた方の半分に入るといふことだ。

では残りの半分は？

「大丈夫なの？ それでも生きていけない人が、きっと多く出てくるわ」

私の口をついて、疑問の言葉が流れ出る。

「だろうね」

留卵は呟いた。

「しかし私にはどうしようもないよ。あなたにもどうしようもないだろう。リルリは既に、人類への奉仕を強制することに賛成していない。リルリに何かを強制させることは私にも、そしてあなたにも不可能だ。私に、いやRUF AISにできるのは、リルリの意志が完遂するのを助けることだけさ。その方がラリラの意志の完遂よりもマシだからね」

私はリルリを見つめた。私の視線に、リルリは顔を背けた。

「私も、人間には生きて欲しいと思います。ただ、誰かに奉仕を強制してまで生きて欲しいとは思っていません」

「誰か、か……」

それがリルリの感覚なのだろう。何かではなく誰か。

「言っておくが、私は公的な判断として、『できない』と言っている。私的な判断は関与していないよ」

留卵は言い訳のように言った。

「でしょうね。でも、私的な判断でも『残念』とは思っていないんでしょう？」

皮肉っぽく私は言った。にやりと留卵は笑う。犬歯を見せて。無関心を示していた彼女の表情に、あくどい感情が漏出した。

「まあね。その点はラリラと同じなんだ。私はW I L Sがロボットに現れたことを喜んだが、近頃の人間には人間のクセにW I L Sが感じられない者もいる。こういう言い方はしたくないが、……リルリやラリラよりも知能学者としての私の興味を惹かない連中だ」

『人工』という言葉を取省いて留卵は言った。彼女は人工知能を開発しているが、先ほど叫んだように基本的な興味は人間のそれを含む知能全般にあるのだろう。その彼女の正直な感想というわけだ。

「美見里さん」

留卯のアクの強い意思が漂うその場の雰囲気を読みよるよう、佐々木三尉が口を開いた。気にしてもしようがない——仕方ないことさ——という突き放した留卯の態度とは真反対の、不安げな感情を込めた視線で私を見つめている。

「なんとか、リルリを説得できませんか？　リルリの先ほどの哲学は、私には人間をも救うべき対象と、大切なものだと思認しているように思えました。私は私の職務上、いえ、一人の人間としても、人が危機に陥る蓋然性を看過できません。お願いします。リルリは既に独立した存在で、あなたに従属するわけではないことは理解しています。それでもリルリはあなたの言葉に耳を傾けるでしょう」

佐々木三尉は私を見つめ続ける。留卯は『好きにすれば』という顔で、無関心に佐々木三尉を見ている。

私はリルリを見つめた。困ったような顔だ。リルリのそんな顔は見たくない。けれど、私にも佐々木三尉と同様の同胞愛がある。それは私の人格の根幹を構成するものだ。それは、もしかしたら同胞である人類を大切にすぎると、人類に生まれただけで価値がある、というような生まれによる差別を生み、ロボットやAGIを虐げる人類の甘えを助長したものかもしれない。

一つだけ明らかなのは、それが、留卯のような、ある種の平等主義——人類もロボッ

トも分け隔てなく、同じように評価されるべき、とする考え方とは相反するものであることであろう。そして、その留卵の思想は、一面では、今のリルリが信奉しているものであるのかもしれない。

「……二人きりにして」

私はやがて言った。

私はリルリが好きだ。

その私の感情が、ただの人形愛なのか、それとも対等な者への愛なのか。それが今、試されようとしていた。